

## 小野蘭山の『本草綱目草稿』 (『本草綱目』講義用覚え書)

磯野直秀

江戸時代でもっとも著名な本草学者・博物家である小野蘭山(1729～1810)の所蔵資料の一部は、おそらく大正年間に岩崎文庫に入り、昭和6年(1931)に東洋文庫に移ったが、<sup>(注1)</sup>小野家には重要な資料がまだ残されていた。現当主の小野強氏はその残存資料のすべてを国立国会図書館に委ねることを決心され、平成13年(2001)7月、<sup>(注2)</sup>蘭山関係資料89点を寄贈された。

『本草綱目草稿』(請求記号WB9-10、4冊)はその1点で、<sup>(注3)</sup>『本草綱目』の講義用覚え書と思われる。蘭山は宝暦3年(1753)、25歳のときに京都で私塾衆芳軒を開き、やがて全国に名声が高まり、寛政11年(1799)71歳のときに幕府に召されて江戸に出た。蘭山は開塾以来、文化7年(1810)に江戸で82歳で没するまで、半世紀以上にわたって『本草綱目』の講述を繰り返したが、<sup>(注4)</sup>本資料はそれに用いたと思われる重要な資料である。

この資料は書き込みであふれ、メモを記した大小の紙片も随所に挟まれている。その紙片の調査を国会図書館古典籍課から依頼された折に、作業上必要な各冊の構成も調べた。

本資料は修理が困難なため、全頁および挟み込まれている紙片などを撮影した上、国会図書館ホームページ・ギャラリー欄「描かれた動物・植物——江戸時代の博物誌」中の『本草綱目草稿』に画像を公開する予定という。しかし、構成が複雑、かつ読みにくいので、上記調査で判明したことの概要だけでも報告しておくのが望ましいと考え、本稿をしたためた次第である。<sup>(注5)</sup>なお、紙片に<sup>(注6)</sup>紛れ込んでいた蘭山の寛政7年書簡下書についてはすでに本誌前号に報告したが、同報文中には蘭山の略歴をはじめ幾つかの関連事項を記してあるので、参照していただきたい。

## (1) 資料の形態

本資料は4冊から構成されている。第1冊は縦25.0×横16.8cm、第2冊23.5×16.7、第3冊23.5×16.5、第4冊25.0×17.0。表紙は青色、小菊模様空押し。題箋は無く、外題・巻次も記されていない。第1冊の表紙下端部に「本草綱目草稿」と記した紙片が貼付されており、登録書名はそれによる。序・跋・目次は存在しない。印記も無いが、筆跡は明らかに蘭山の自筆である。

用紙には無枠無罫の半紙が使われている（巻頭原色図版1）が、第4冊の本文部だけは刷紙紙（四周単辺／10行有界／柱記ナシ、図版2）を用いている。また、どの冊も、本文の前後に雑多な記述で埋まった数頁分があり、それぞれの冊子を作成したときに書き入れ用として数枚の白紙を入れたらしい。しかし、この部分も本文も、朱筆・墨筆の書き込みで埋め尽くされてしまっている。そこで、本来は袋綴じだが、ほとんどの用紙は袋綴じの折目を切り開き、紙背にまで細字で追記を書き込んである（<sup>(註7)</sup>図版3）。

したがって、丁による表示が難しいので、切り開いた紙背も含めて「頁」で数えると、第1冊194頁、第2冊414頁、第3冊332頁、第4冊228頁、計1168頁である。また、挟まれている紙片は346枚に達する。

## (2) 講義稿ⅠとⅡ

本資料は3種類の講義稿（ⅠA・ⅠB・Ⅱ）に大別することができる。それぞれの内容は以下のとおりである：

講義稿ⅠA：虫、鱗（一・二のみ）、禽、獸、人

講義稿ⅠB：虫、鱗（一・二のみ）、禽、獸、人

講義稿Ⅱ：水、火、土、石、草、穀、菜、果、木、服器（服帛・器物）、虫、鱗、介、禽、獸

講義稿ⅠAとⅠBは様式がほぼ同一で、品名にそれぞれ和名や漢異名と簡単な注記を付するだけであり、1頁に10～30にも及ぶ品名が存在する（図版4）。講義稿ⅠAには『本草綱目』に所収されている見出し品名がほぼすべて記されているが、講義稿ⅠBはⅠAに漏れた品や、ⅠAの補足記事、『本草綱目』の見出し品名以外の品から成る。したがって、ⅠAとⅠBは併せて1組の講義稿と思われる（以下、AとBをまとめて記す場合は講義稿Ⅰとする）。講義稿ⅠBの末尾に「宝曆七年〔1757〕丑十月七日夜了」とあるが、これが講義稿Ⅰを

書き終わったときであろう。蘭山が私塾衆芳軒を開いたのは宝暦3年、25歳のときであるから、講義稿Ⅰは蘭山がまだ20歳台のときに作った講義用覚え書である。

講義稿Ⅱは、注記などに記されている年記から判断して、講義稿Ⅰより後の作成である。各頁に1～数品を載せ、品名を行頭にやや大きめの字で記し、形式は講義稿Ⅰより整っている(図版1・2)。墨の濃さや文字の大きさから判断して、講義稿を作成したときに見出しの次に和名・漢異名と、講義稿Ⅰよりはやや長めの注記を書き入れ、また後の書き込み用に数行の空白行を置いたようである。もっとも、結局はその分も書き込みで埋め尽くされてしまっている。

講義稿Ⅱには作成年が記されていないが、手掛かりはある。それは冊4の禽部「鴛鴦」の項目に「鴛鴦 アカガシラ」と記している(これは作成時の記入で、後からの書き入れではない)ことである。蘭山は鴛鴦=アカガシラ(鴨の類)と初めは<sup>(注8)</sup>考えていたが、天明3年(1783)までにその説を撤回したことがわかっている。したがって、講義稿Ⅱが作成されたのは天明3年以前と考えられる。実際に、「アカガシラ」の語は朱筆で棒線を引いて消されて<sup>(注9)</sup>いる。

一方、気付いたかぎりでもっとも遅い書き込みは、第4冊「伏翼」(コウモリ)の項目に記された「文化丁卯[4年=1807]九月四日、神田新橋詰民家壁間ヨリ伏翼……」である。この日付は蘭山が亡くなる2年半前で、江戸に移った後も蘭山がこの講義稿Ⅱを使っていたことを物語っている。

### (3) 各冊の構成

前節で記したように、本資料は3種類の講義稿から成るが、それが複雑に入り組んでいる。表1は、その構成を冊ごとに整理したものである。

●第1冊はもっとも複雑で、4部に分かれる。

①最初に「本草正統傍出之図」がある。これは『神農本草経』から始まって『本草綱目』に至る系統図で、主要な本草書(正統)とそれ以外の著作(傍出)の著者や内容を示しており、『本草綱目』序例中の「歴代諸家本草」などから作成したと思われる。ただし、蘭山門下が筆記した『本草綱目紀聞』『本草綱目会識』などの蘭山講義録にはこのような系統図が含まれていないので、この部分は講義したのではなく、適宜参照したり、引用するための覚え書だろう。

表1 『本草綱目草稿』の本文構成

冊次	講義稿	本文の構成
第1冊①	—	「本草正統傍出之図」*
	② II	水部・火部・土部・石之一～五・虫之一（蜂蜜～原蚕）**
	③ IA	虫之一（石蚕より）～二・鱗之一～二（竜類・蛇類）・虫之三～四・禽之一～四・獸之一～四・人部
	④ IB	虫之二～四・鱗之一～二（竜類・蛇類）・禽部・獸部・人部 末尾：「宝暦七年 [1757] 丑十月七日夜了」
第2冊	II	草之一～十一・穀之一～四・菜之一～三（茄まで）
第3冊	II	菜之三（苦茄より）～五・果之一～六・木之一～五・服器之一～二・鱗之三～四（魚類）・介之一～二（亀・蟹・貝・ヒトデなど）
第4冊	II	虫之一（石蚕より）～四・鱗之一～二（龍類・蛇類）・禽之一～四・獸之一～四***

\* 『神農本草経』から『本草綱目』までの系統図。

\*\* 講義稿Ⅱの「原蚕」に続く「石蚕」以降は第4冊の冒頭に置かれている。

\*\*\* 「人部」は講義稿Ⅱに無く、第1冊の「講義稿ⅠA・ⅠB」に含まれるだけである。

②について講義稿Ⅱ（136頁）。水・火・土・石部の順だが、植物には続かずに、いきなり虫部に入る。それも「虫之一」の途中の「原蚕」までで中断する。これに連続する講義稿Ⅱの「石蚕」以降は冊4に置かれている。

③講義稿ⅠAが「虫之一」の「石蚕」から始まり「人部」で終わる。全24頁。

④講義稿ⅠBが「虫之二」から始まり、「人部」で終わる。このⅠBはわずか4頁。その末尾に「宝暦七年丑十月七日夜了」の日付が記されている。

上記③④の講義稿Ⅰは第1冊だけにあり、それも動物部（介部と鱗之三～四を欠く）だけで、水～石部・植物部・服器部は含まれていない。

●第2冊は講義稿Ⅱの植物部「草之一」から始まり、「穀部」「菜部」と続き、「菜之三」の途中の「茄」まで。

●第3冊は第2冊の続きで、「菜之三」の「苦茄」から始まり、「果部」「木部」

「服器部」、次いで動物部の「鱗之三～四」（魚類）、「介之一～二」が置かれている。

- 第4冊は、第1冊の②講義稿Ⅱ「虫之一」の続きである。すなわち、「石蚕」から始まって「虫之四」までがあり、「鱗之一～二」（龍類・蛇類）、「禽部」、「獸部」と続くが、『本草綱目』で末尾に当たる「人部」は無い。

このように講義稿4冊の構成は非常に込み入っているが、たとえば以下の手順でこのようになったと考えたらどうであろうか。

- ①『本草綱目』は、「水・火・土・石・草・穀・菜・果・木・服器・虫・鱗・介・禽・獸・人」の各部の順に配列されている。そこで、講義稿Ⅱを最初に作成したときは、第1冊に「水・火・土・石」、第2冊・第3冊に「草・穀・菜・果・木・服器」、第4冊に「虫・鱗・介・禽・獸」をそれぞれ配分して講義稿を記した。
- ②講義稿Ⅱには「人部」が欠けているが、人部は講義稿Ⅰの記述で十分だとして、置かなかった。
- ③古い講義稿Ⅰのなかで参考に残しておきたい部分を、量的にもっとも少ない第1冊の「水・火・土・石」の後に付け加えた。
- ④講義稿Ⅱ「虫之一」の「蜂蜜～原蚕」の個所だけを第1冊に移動した。講義稿ⅠAに「蜂蜜～原蚕」が欠けていたからかもしれないが、わざわざ移す必要は無かったように思える。
- ⑤「鱗之三～四」（魚・イカ・タコ・エビ）と「介之一」（亀・蟹）・「介之二」（貝類）を第3冊の「服器」の後に移した。その理由をはっきりしないが、『本草綱目』の通りに「服器」の次に「虫部」から始めると、見たことのない種類や耳にしたこともない種類が続出して受講者が戸惑うおそれがある。そこで、なじみ深い魚介類や亀類を動物の最初に講述し、動物について理解しやすくしたのではないか。

#### (4) 講義稿Ⅱの記述から

この講義稿Ⅱには、刊本『本草綱目啓蒙』（以下、『啓蒙』：注4参照）に含まれていない記述や、『啓蒙』では簡略化されている記述が散見する。そのうちの幾つかを紹介してみる。「本文前」「本文後」は、本文の前後にあらかじめ設けられていた数丁の書き入れ用の部分に記載されているもの、「メモ」は挟み込まれている紙片への記入である。「：」以降は磯野による注記。

- 【草之四・胡盧巴<sup>コロハ</sup>】「胡盧巴……享保十八年新渡」：コロハは地中海沿岸原産のマメ科植物で、古くから中国で薬用に栽培していた。『啓蒙』では、単に「享保年中、唐種ヲ伝テ、今ハ多ク栽」となっている。<sup>(注11)</sup>
- 【第2冊本文後】「番薯 [サツマイモ] ヲ……八里半ト云。外皮赤イロ・内白ヲ赤ハチリト云。サツマハチリトモ云。……凡八里ノ花ハ旋花 [ヒルガオ] ノ形ニ同、不結実」：『啓蒙』では「甘藷」の項に肥前方言として「ハチリ」「赤バチリ」「サツマバチリ」と記されているが、「ハチリ」の意味が記されていない。それが本資料の記述で「八里」とわかった。『広辞苑』によると、「八里半」は焼芋の異称として使われ、「栗 (=九里) なみの美味」の意、つまり「栗 (九里) より (四里) 旨い十三里」と同工異曲の表現であった。
- 【第2冊本文後】「芸州巖島外宮ノ山ニ、近年黄桜ヲ生ス。去年ヨリ花サク。深黄ニシテ棣棠 [ヤマブキ] ノ如シ。寛政四年 [1792]」
- 【第2冊本文後】「海ヘチマ [海綿] ノクズケタルヲ、薩州ニテ波ノ花ト云、テマリノ中入トス。ヨク高ク上ル也」：『啓蒙』に「海綿」は取り上げられていない。
- 【第3冊本文前に挟まっていたメモ】浪華木村氏からの質問に対する返答下書：木村氏は門人木村兼葭堂<sup>けんか</sup>であろう。  
「茶藨—茶ダケ 桑藨—桑タケ …… [以下は略するが、キノコ (藨) 計18品の漢名に対する和名が記されている]  
右、呉藨譜ノ考、天明巳年 [5年 = 1785] 十月六日、答於浪華木村氏、下同問。  
南都大冨ト云地ニ、藜蘆<sup>りろ</sup>ニ充ツベキモノ三種、  
ホツクリ 初生、棕葉ニ似テ、根連珠ヲナス  
ササホツクリ 葉同クシテ、根ニ連珠ナシ  
スケホツクリ 一根一葉……」
- 【木之三・蠟梅】「蠟梅……自朝鮮渡レリ、東福門院被取寄ト云々」：東福門院は後水尾天皇 [在位 1611 ~ 29] の中宮、2代將軍徳川秀忠の娘。『啓蒙』には「後水尾帝ノ時、朝鮮ヨリ来ル」とだけ記されている。
- 【木之五・竹】「天明三卯年 [1783]、奥州松前、竹実多出来。卯年、奥州凶作不毛……仙台領ハ三十万人モ飢死ト云。南部津軽、右ニ同キヨシ。松前、右竹実ヲ以、飢ヲシノギ、不死ト云。……江戸ニテクマ笹ト云モノナリ」
- 【虫之二・蜻蛉】『啓蒙』に見えない記述が多い—「ランジョ (雄)、メト

(雌) —青緑ニシテ黒色ナキ也、メトニ糸ヲツケ釣テランジョヲトル」：現在のギンヤンマか。「アケズ(仙台)、身中ホド白ヲヲトコアケズトモ、イセラアケストモ云(南部、仙台)」：コシアキトンボ。「大ナルトンボニシテ、身黒ト黄ト間り、末ニクルマノ形アリ、クルマトンボト云」：ウチワヤンマ。「井戸トンボ、腹ニ黄筋ニツアリ、惣身コンシヤウ〔紺青?〕色ニシテ、光アリ、美ナルモノ也。是雄也、雌ハ薄黄赤色也」：種名不詳。「ウロウロトンボ、牛ヤンマノ小ナル者也、晩方座敷ノ内ナドヘ飛来ル、ウロウロ飛廻ル」：クサカゲロウやウスバカゲロウの類だろうか？

- 【虫之三・蚱蜢】「ミンミントナクラ仙台ニヲホゼミト云」：ミンミンゼミ。「ツクツクボウシニ似ル蚱アリ、深山ニ多シ。タマタマ里辺へ来テモ高梢ニ居テ、ナク声高クシテ清亮ナリ。小兒チゾト云、其声ヂヂバトキコユ、チイチイセミ(久留米)」：ニイニイゼミ？
- 【鱗之三・比目魚のメモ】「畿内・西国共ニカレイト称ス。江戸ニ大ヲヒラメ、小ヲカレイト云。常陸・上総・下総ノ浦、ミナ大ヲカレイ、小ヲヒラメト云」：享和3年(1803)3～4月の房総・常陸採集行以後の記入であろう。
- 【鱗之四・鱧魚】「七星魚……文化元年〔1804〕甲子六月、十三匹渡、江戸へ七尾来(八尾ノ内、一死)。粘アルコト、ナマズノ如シ」：七星魚はタイワンジョウで、このとき、生きた魚が江戸城に到着し、將軍家齊の観覧に供された。幕医栗本丹洲が随伴して見ることを許されて記録を残しているが、この記載を見ると、蘭山もその場に同席したように思える。
- 【禽之一・鶴】「鶴、京師・近江ニ少ナシ。八幡辺ノ沢中ニ多シ」：鶴はコウノトリで、江戸では、浅草寺をはじめ、多くの寺院の屋根などに巢を造り、かなりの数の個体がいたようである。
- 【禽之一・鷺】「紅鶴 トキ、サギノ類ニシテ、ウスアカシ。嵐山ニアリ」：京都のトキについては、門下の寺尾隆純が蘭山の講述を記録した『本草綱目会識』(天明5年=1785成)に「京ニ多シ……林ニ巢ヲナシ、昼ハ遠飛ス。華頂山智恩院ノ前ノ林ニ多ク棲ム。夕暮ニハ魚ヲモチ、林ニカヘ販ルコトアリ」と記されているが、江戸での講義を記録した『啓蒙』には、京都をはじめ関西の記事が少なく、トキの個所でも上の記事に触れない。

「モンドガラス(廿日市)、上田主水宗吉〔モンド広島藩家老〕始テ芸州へ持来、ユヘニナヅク故名」：廿日市は広島市の南西。モンドガラスはトキの方言で、広島へこ



うしてトキが移入されたのは主水在任の元禄2年～享保9年（1689～1724）の間とされる。<sup>(注12)</sup>

- 【禽之二・白鷗】「白鷗……天明二年〔1782〕四月、四条河原ニテ見」：ハッカンは大型のキジ類で、中国南部から東南アジアに分布する。前項に引用した講義録『本草綱目会識』（1785年成）にはこのハッカンの記述が載せられているが、『啓蒙』には無い。
- 【禽之三・烏鴉】「筑前ニハ、ハシ太〔ハシプトガラス〕多、ハシボソ〔ハシボソガラス〕ハ少シ」：現在の都会ではハシプトガラスが多く、ハシボソガラスは少ないが、江戸時代は逆であった。『啓蒙』には、「慈鳥〔ハシボソガラス〕、市中ニ多ク居カラスナリ。故ニ、サトガラスト云」〔烏鴉〔ハシプトガラス〕、山中ニ棲テ、市井ニハ出ズ〕とある。もともと、「烏鴉多クシテ、慈鳥少キ地モアリ」とも記すが、これは上記の筑前の場合などで、例外的な事例だった。

## (5) 方言の記載

『本草綱目啓蒙』に多数の方言が記されていることはよく知られているが、本資料中の記載は『啓蒙』よりもさらに多いと思われる。以下に、いくつかの例を挙げる。<sup>(注13)</sup>ただし、記載地名だけが違う例は取り上げていない。

- 【草之二・石蒜】石蒜は現ヒガンバナ。その方言が多く記録されているが、下線を付した語は『啓蒙』に無い—「シビトバナ、テンガイバナ（尾張浅井郡、備前）、ヒガングサ、ヒガンバナ（肥前小城）、シタコジケ（南都、近江）、ステゴグサ（筑前）、ステゴノ花（筑前）、手グサリグサ（播磨、姫路：手腐り草か）、舌マガリ（尾張浅井郡）、下マガリ（伊勢亀山）、牛モメラ、牛ノニンニク（尾張浅井郡）、曼珠沙花（竜野）、毛ナシ芋、目ナシ芋（伊勢）、ヘソビ、ホソビ（伊勢）、狐ノシリヌグヒ（敦賀）、サテイロン、キツネハナ（出雲）、ハヌケグサ（佐伯、作州）、狸々花（飛騨）、シビレ花（竜野、赤穂）、シビレ、三昧バナ（伊勢）、イチヤニヨロリ〔一夜ニヨロリか〕、ジユズ花（伊予西条）、ノタイマツ（能登）、ドクスミラ（島原）、ホドヅラ（伊予松山）、デゴクハナ」

以下は紙背—「勢〔伊勢〕=セソビ、中国・武州=シビトバナ、ヒガンバナ、キツネノカミソリ、上総・美作=イウレイバナ、ヒガンバナ、越後・信濃=ヤクビウバナ〔厄病花か〕、京=カミソリバナ、駿〔駿州〕=カハカンジ、唐津=



ドクズミダ、土佐=シレイ、シビトバナ、ススガケ「テアキバナ（丹波篠山）、狐ノタイマツ（敦賀）、シビラ、キツネノイモ（下久世）、狐ノ扇（美濃）、牛ヲビ（同）、イトトキバナ（一時花？）、トウイビラ（豊後）」「松坂=根ヲヘソビ、花ヲ下刈花〈シタカリバナ〉ト云」

- 【虫之ニ・蜻蛉】『啓蒙』では計 117 の和名・方言が載せられているが、本資料には計 100 ほどが記され、以下の 19 は『啓蒙』に所収されていない。ただし、書き入れがあちこちに飛んで、それぞれがどの種類の方言かは明確ではない。：コウヤ（美濃）、アカアケズ（南部）、ナンバンアケズ（南部）、ゲンザヤンマ（筑前）、ヲトコアケズ（仙台）、イゼラアケズ（仙台・南部）、サルトンボ（姫路）、経ヨミ（西大寺）、クルマトンボ（『啓蒙』所収のものとは別種）、井戸トンボ、アケズボウツ（薩摩）、ミヤマトンボ、オニトンボウ（伊勢山田）、カツヲトンボ（赤トンボの類）、ベタ（下迫：ヤンマの雌）、ヒカリトンボ（土佐？）、ウロウロトンボ、クロガネトンボ（ヤンマの類）、ヲロシ。地名の「下迫」は、門下の柚木常盤がいた近江国蒲生郡の下迫（現滋賀県蒲生郡日野町）だろう。
- 【鱗之三・メダカのメモ】「鱒魚」の項でメダカについても述べるが、『啓蒙』にはその方言が 21 だけ挙げられている。一方、本資料に挟まれている紙片には以下の 41（地名は記載のまま）が記されており、うち下線のある 23 の方言は『啓蒙』に含まれていない：メダカ（東武）、メメザコ（京、予）、ウキンジヨ（同）、ダンギバウ（同）、コメンジヤコ（大和）、メタタキ（南都）、ウキタ（大坂東南）、コマイジヤコ（大坂西北）、メタバリ（和泉）、メメジヤコ（堺、近江、因、越前）、メバチ（勢）、ネバイ（同）、コバイ（白子、美濃）、ウキス（尾）、ネンハチ（遠）、メンバイ（同）、ピツコ（相ノ三浦）、メンパチ（雲）、ウルメ（雲、越後）、ウキイヲ（伊予）、アフラコ（土佐）、タウヲ（肥前）、カネサ（越中）、コメザコ（同）、ハリミズ（奥）、メザコ（南部）、メヌケ（同）、ジヨンバラコ（最上）、ウキタサコ（下迫）、メハリ（同）、ウキンチヨ（同）、カタクチ（津）、テンテンフク（越前）、メイタ（長防）、タイナ（防ノ下松）、ネブツゴ（同）、ネンブツゴ（雲）、ヲクロバエ（佐）、バンダイ（大坂）、メツタソ（紀）、アワフキ（江）。地名の下迫については、前項参照。
- 【介之ニ・海燕の後】「海胆、ガゼ（仙台）、カゼ（三河）、イガ（備前・宮津）、ヲコゼノクハンス（姫路）、ドモリクハンス（土州ハネ浦）」「筑前ニ、

褐刺ノヲ、ムマクソガゼ [馬糞ガゼ] ト云：『本草綱目』には「海胆」の項目が無いので、刊本の『啓蒙』には含まれていないが、ここに書き込まれている方言はウニの和名の貴重な資料である。<sup>(註14)</sup>なお、クハンス=クワンス・カンス=罐子で、茶釜のこと。ウニの殻は半球型が多いので、それを茶釜に見立てたらしいが、この「○○カンス」式の方言は現在知られていない。

## (6) 『蘭山誌』

小野家寄贈書のなかに、『蘭山誌』(W 346 - N 6、2冊)という資料がある。これは蘭山の御子孫小野春雄氏(1943年没)が蘭山の年譜として執筆された原稿(未完稿)と思われる。第2冊が草稿で、第1冊はそれを増訂・清書したもの。既存書からの引用が多いが、小野家にあった資料に基づくと思われる記述も含まれている。『本草綱目』の講義と関連して、特に注目される2箇所を以下に挙げる。

①「寛政3年(1791)12月13日から翌4年2月末にかけて、蘭山が寛文版和刻本『本草綱目』の誤字・訓点の誤りを正した」旨の記述があり、次のように、詳細な日程も挙げられている。巻次が所々飛んでいるが、全巻を補訂したと思われる。わかりやすくするため、句読点などを加え、【 】内を補った。

「寛政三年十二月十三日ヨリ十八日ニ至り、水火土部三卷  
十八日ヨリ二十三日ニ至り、金石部一卷  
二十三日ヨリ二十八日ニ至り、石部卷九・十、二卷  
寛政四年正月九日ヨリ十二日ニ至り、草部第十四卷  
十二日ヨリ十四日ニ至り、草部第十五卷  
十四日ヨリ十六日朝ニ至り、草部第十六卷  
十六日ヨリ二十一日ニ至り、【草部】第十七・十八、二卷  
二十二日ヨリ二十三日、同第十九・二十・二十一、三卷  
二十三日・二十四日及二十七日ノ三日間ニ、穀部第二十三・二十四、二  
卷  
二十八日ヨリ晦日ニ及ビ、【穀部】第二十五卷ヲ校正セリ  
二月朔日・二日ニハ、菜部第二十六卷  
三日ヨリ四日ニ互り、【菜部】第二十七・二十八ノ両卷  
五日・六日両日ニ、果部ノ卷第二十九・三十、両卷

十四日、服器部卷第三十八

十五・十六ノ両日ニ、虫部卷ノ三十九及ヒ四十

二月十八日午後ヨリ翌十九日卯刻ニ到リ、鱗部卷ノ四十二（「鱗部」は「虫部」の誤記か）

同十九日ヨリ二十日ニ至リ、鱗部卷ノ四十四

二十三日ヨリ二十五日ニ至リ、鱗部卷ノ四十七・四十八・四十九卷ノ三卷ヲ校正セリ」（「鱗部」は「禽部」の誤記か）

この『本草綱目』は東洋文庫に現存する『[校正] 本草綱目』（三Jaろー32、39冊）と思われ、たしかに同書は蘭山の手で詳しい補訂が行なわれている。ところが、この資料には上記日程の書き込みが無い。日程を記したメモが挟まっているかと探したが、それも見当たらない。別な個所に記録があるのかもしれない。このように原資料が未発見なので、少々長いですが、『蘭山誌』の全記録を再録しておいた。

- ②「寛政十二年〔1800〕……此歳、多紀元簡〔医学館館主〕、幕府ニ上申ス」との前文に続き、次文がある。

「蘭山、去未〔寛政十一年〕三月、京都ヨリ被召下、於医学館講書被仰付候。以後、一月二十二日宛出席仕、本草綱目講業、甚出精仕候。御手充〔手当〕ヲモ被下置候義ニ付、別段奉申上候モ奉恐入候得共、老人之義遠国ヨリ罷出、殊ニ一席モ無懈怠、誠ニ皆勤ニ御座候間、何卒可罷成義ニ御座候ハバ、薄キ御品ニテモ、当暮御褒美被下置候様仕度、奉願候 以上」

小野蘭山は幕府に招かれて寛政11年（1799）3月に江戸に移住した直後から『本草綱目』の講義を始めた。この資料によって、それが1月に12回という頻度で行なわれていたことが初めて判明した。そして、元簡の申請どおりに蘭山は寛政12年12月25日に白銀7枚を拝領したこと、講義が一巡して「満会」になったのは、翌享和元年（1801）11月9日だったこと、その後もほぼ毎年同時期に白銀7枚を下賜されていたことが、『小野蘭山公勤日記』に記されている。

## (7) おわりに

この資料はさらに検討を進めれば、多くの新知見を得られると思われる。第一には、蘭山がどのような資料を利用していたかがわかる。たとえば、書

き込みのなかに「程劍南云……」、「王世古云……」という記述がしばしば見られるが、これは、平沢元愷編『写生画冊問答』（異題本：写生画帖鑑定書、国会図書館 189-320）からの引用と思われる。同書は高松藩主松平頼恭編『写生画帖』（3帖、香川県歴史博物館保管）に描かれた草木の漢名などを、幕府の儒者平沢を通して長崎に居た清人の程劍南・王世古らに質問した資料であり、安永6年（1777）の作成である。<sup>(注17)</sup>あまり知られていない資料で、転写本も稀だが、蘭山はそのようなものにも目を通していた。

第二には、方言資料としての価値。すでに本稿で数例を示したように、本資料には『啓蒙』に記されていない方言がかなり存在する。

第三には、蘭山の見解の変遷をたどることができる。第2節末に「鴛鴦」についての見解が変わった例を挙げたが、これ以外にも見解の変遷が知られている事例があるし、<sup>(注18)</sup>本資料を丹念に調べれば他の例も発見されるにちがいない。

本草家・博物家の講述が弟子によって記録された例は小野蘭山だけでなく、いろいろ残っているが、本資料『本草綱目草稿』のように講述者自身の講義用覚え書が現存する例は非常に稀である。その意味で、本資料は詳細な検討に値すると思う。

本資料自体からは離れるが、最後に今後の課題を一つだけ挙げておく。それは弟子側の講義筆記録の探索である。蘭山の『本草綱目』講述については、京都時代の門下生が記した講義録が数多く知られているが、<sup>(注19)</sup>不思議なことに江戸に移ってからの講義録は一つも知られていない。『啓蒙』が刊行されたので、講義録が残らなかったのだとも言われるが、刊本の有無に関わらず、聴講者はみなノートを取るわけで、その記録がすべて失われたとは思えない。それを探し出せば、『啓蒙』との対比が出来る。『啓蒙』は蘭山の孫で後継者の小野職孝（<sup>けいほ</sup>憲畝）の筆録をもとにしているが、編集の段階でかなり手を加えていると思われ、講義を聞いたときの記録とは隔たりがあるはずと思う。したがって、本資料と刊行本との対比ができれば、興味深いのだが……。

## 注記

- (1) 渡辺兼庸、「小野蘭山と東洋文庫所蔵の自筆本」、『東洋文庫書報』、11号、1979年。
- (2) 「国会図書館に寄贈された小野蘭山関係資料の目録」、『愼齋研究会だより』、94号、2001年：この目録は遠藤正治氏の作成による。ただし、国会図書館

の請求記号は記されていない。

- (3) 『本草綱目』（1596 刊）は明の李 時珍の著作で、江戸時代の日本では本草・博物誌の根幹となった。初版本の揃いは世界で 7 点しかないと言われるが、うち 1 点は国会図書館（請求記号、102-5、27 冊）に、別の 1 点が東洋文庫（請求記号、XI-3-A-C-23）に所蔵されている。
- (4) 蘭山の京都時代の『本草綱目』講義は、門下生の筆録を元にした『本草綱目紀聞』『本草記聞』『本草綱目会識』『本草綱目訳説』などが残っている。また、江戸での幕府医学館における第 1 回講義を孫の小野職孝が記録し、これを元にした刊本『本草綱目啓蒙』があるが、これには下記の 4 版がある。  
初版 『本草綱目啓蒙』、48 卷 27 冊、小野職孝校、享和 3 年～文化 2 年（1803～05）刊：影印本→杉本つとむ編著、『本草綱目啓蒙：本文・研究・索引』、早稲田大学出版部、1974 年。  
再版 『本草綱目啓蒙』、48 卷 27 冊、小野職孝校、文化 8 年～文政 12 年？（1811～29？）刊。  
3 版 『[重修] 本草綱目啓蒙』、35 卷 36 冊、<sup>かけはし</sup>梯 南洋増訂、弘化元年（1844）刊。  
4 版 『[重訂] 本草綱目啓蒙』、48 卷 20 冊、井口望之重訂、弘化 4 年（1847）刊：翻刻本→『本草綱目啓蒙』、平凡社東洋文庫、1991～92 年。
- (5) 本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加え、片仮名で記されている地名は漢字に換えた。引用文中の（ ）は原注、〈 〉は原本の振仮名、[ ] は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき、単語に下線を付して分かりやすくした場合もある。
- (6) 磯野直秀・問島由美子、「小野蘭山寛政七年書簡下書」：付、「範塾軌」、『参考書誌研究』、63 号、2005 年。
- (7) 場所によっては、紙背部さえ書き込みで空白が無くなっている。一般の資料では追記の場合に紙片を貼りつけるのが普通だが、本資料はこのように書き込みが多くて紙片を貼りつける余地も無いからだろう、随所にメモを挟んでいるが、貼付例は少ない。なお、表裏ともに書き込みがあるので、虫損があっても裏打ちができない。
- (8) 高橋達明、「小野蘭山本草講義本編年攷」、『東アジアの本草と博物学の世界』（山田慶児編）、下巻、思文閣出版、1995 年。

- (9) 『本草綱目啓蒙』(→注4)では、「鴛鴦 詳ナラズ」となっている。
- (10) 『本草綱目』講義の門下生筆記録や刊本『本草綱目啓蒙』(→注4)では、各部が『本草綱目』とまったく同一の順に配列されている。
- (11) 以下、『本草綱目啓蒙』の引用は初版本による(→注4)。
- (12) 安田 健、「トキの文献」(その10)、『応用鳥学集報』、9巻、17～31、1989年：文献番号、1193。
- (13) 「禽之三・練鵲」に「長府ノレンジャクハ別也、方言ニ記ス」と記されているが、その『方言』という著作は小野蘭山著『博物名譜』(東洋文庫、三Jaろ-28、自筆本、3冊)を指すらしい。これは方言を頭音のイロハ順に配列し、「ベニトンボ 赤卒 雲州」「ハタヲリゲモ 女郎ゲモ 松山」のように「方言 漢名または標準的和名 地名」を示したもので、全11,260語を収録している(注1文献による)。「享和辛酉」(元年=1801)と記した個所があるので、江戸に来た後も新しい収録語を加えていたことがわかる。いずれ、この著作と『本草綱目草稿』および『啓蒙』の方言を対比してみたいと思っているが、まだ果していない。
- (14) 磯野直秀、「小野蘭山の随筆」、『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』、34号、2003年：報文中の「南楼随筆」の項を参照。磯野直秀、「タコノマクラ考：ウニヤヒトデの古名」、同前、39号、2006年。
- (15) 多紀元簡の申請は公的なものだから、「月二十二日」は医学館での講義だが、蘭山はそれ以外に、自宅での講義や若年寄堀田正敦宅での講義も行っていた(遠藤正治、『本草学と洋学：小野蘭山学統の研究』、122～123頁、思文閣出版、2003年)。
- (16) 『小野蘭山公勤日記』(国会図書館W 221-N 32、3冊、自筆)。『蘭山先生日記』(国会図書館特 1-3649、3冊)は、この日記を白井光太郎が明治42年(1909)に写した写本であり、その翻刻・解説が出版されている→末中哲夫・遠藤正治、「蘭山先生日記」、『実学史研究』、V～VII、1988～91年：この翻刻資料には、小野職孝編『御用留』(国会図書館W 221-N 33、自筆本、2冊：享和元年から文政4年にいたる記録)も含まれている。なお、『蘭山先生日記』には、当時『小野蘭山公勤日記』に挟まれていた書簡草稿が寛政12年6月1日条の次に写されている。これは蘭山から実子の長谷川民部に宛てた書簡(寛政12年5月9日付)で、『本草綱目啓蒙』の成立事情や孫の佐一郎を孫養子にする件など、重要な内容を記したもののだが、白井が写した

後に紛失したらしく、現存しない（幸い、上記「蘭山先生日記」および注 15 に挙げた『本草学と洋学』の 114 ～ 5 頁に翻刻・解説されている）。

(17) 磯野直秀、「日本博物学史覚え書・XI」、『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』、30号、2001年：第6節、『写生画冊問答』。

(18) 注8文献。

(19) 注4参照。

(いその なおひで 慶應義塾大学名誉教授)